

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 541

1968年 に出会うために、存在に向かって言葉の外へ、表現の外へ

「1968年」に一体、なにが起こったのか、については、いつかは真正面から向き合わなくてはならないと思いつづけてきた。思っていただけではない。自分が書きつづけていることが、「1968年」から突き迫られた問いに自然に向き合っていくようになるのが一番よい、という気持で、これまでに多くの文章を書き綴ってきた。もちろん、書きつづけるだけでは「1968年」からの問いに向き合えないことも感じ取っていた。「1968年」は言葉を超える次元で躍動していたからだ。そうすると、言葉で触ることのできない「1968年」に言葉で接近しようとする事自体が、大きな背反だろう。かつていまも背反の渦中に置かれているが、いくら可能性から遠ざかろうとも、「1968年」に言葉に向かわせようとする事だけが私に残されている最大の武器である。

言葉によって遮られているという感覚、だけが私を「1968年」に対して立ち止まらせていたわけではない。「自分を超える水準」をどのようにして展開するか、という自問のなかでも、「1968年」は私を立ち止まらせていたのだ。いうまでもなく「1968年」は私をはるかに超える水準で展開されてきた領域である。私の水準において「1968年」を捉えることができないのは、はっきりしている。自分を超える度合いだけ、いくらか「1968年」がみえてくるようになるかもしれないことには気づき始めていた。だが「自分を超える水準」が固定すれば、みえてくる「1968年」も固定されてしまう。「1968年」がますますみえてくるようになるためには、「自分を超える水準」も持続しながら加速されなくてはならない。そんな考えをするようになったことが、私をこれまで直線的に「1968年」に向かわせなかったのである。

いま私は、できてもできなくても、1968年」に向き合おうとしている。機が熟した、と思っているわけではけっしてない。機が熟していなくとも、「1968年」に向き合わなくてはならない。私がそう決心したことにおいて、機は熟しているといえるのかもしれない。また、私が「自分を超える水準」を持続ししているのかどうかも、私自身よくわからない。すべては、私が向き合おうとする「1968年」がさらけ出してくれるにちがいない。「自分を超える水準」で向き合えなければ、「1968年」がこちらに突き迫ってくることもありえないだろうからだ。

「時熟」という言葉がある。満ちていくような時間の成熟のなかで人間が育まれていくことだ、と解せられる。「時熟」が私を掠め去ったのかどうかは知らないが、「1968

年」について考えれば考えるほど、松下昇がやってきたこと、やろうとしてきたことについて思いを馳せずにはいられなかった。いや、逆かもしれない。松下昇について考えれば考えるほど、「1968年」に一体、なにが起こったのか、に全神経を集中させずにはいられなかった。「1968年」のとてつもない革命性を唯一見通していたのが松下昇であり、彼だけが「1968年」からの問いを身をもってよく受け止めることのできた存在であることが、私にはよくみえるようになってきたのだ。別の言葉でいえば、1960年代末期以降の松下昇の足跡のなかにのみ、「1968年」が最大に息づいていることが数十年を経てようやく私にも感じ取れるようになったのである。

闘争参加者たちの大半に「1968年」から押し寄せてくる圧倒的な波動がよくみえなかったのは、大きな跳躍を何度も重ねる「1968年」が小さくジャンプする私たちの視界に収められる筈がなかったからだ。私たちの視界から逸脱している「1968年」の圧倒的な跳躍に私が気づき始めたのは、人間としての枠組みを何度も突き破りかねない松下昇の闘争を展開する跳躍を何度も近くで目撃したからである。おそらく目も眩むような跳躍のなかでしか「1968年」は捉えられなかったし、その勢いによく対抗できなかったのだろう。しかしながら、何度も目撃していたにもかかわらず、また私自身の跳躍をずっと問い迫られてきたにもかかわらず、「1968年」の跳躍はもちろんのこと、松下昇の運動における跳躍すらも跳躍そのものとして捉えることはできなかったのである。長い間、自分の目にみえないものはみえないものとして私もまた、取り扱ってきたのだと思う。

自分の目にみえないからといって、存在していないわけではけっしてない。目にみえないものもまた、発しているにちがいないその声を「自分を超越する水準」において聞き取れるようになったのかどうかはわからないが、私にも聞こえるようになってきた。松下昇の発言や文章からではなく、全くかかわりのない他人の文章から松下昇の声と交差する言葉が聞こえてきたのである。そのいくつかに触れてみよう。

04年12月28日に急性骨髄性白血病で71年の生涯を終えたスーザン・ソントグが、99年に大江健三郎と「往復書簡」を交わしたことがあり、それは朝日新聞紙上に掲載された。ソントグは6月3日付書簡で、《私は作家としての全生活を通じて、公然と自分の立場を表明してきました。アメリカの帝国主義とヴェトナムにおけるアメリカの戦争への反対などの政治的な立場しかり。(中略)立場を表明することは自分の義務だと感じたのです。サラエヴォが包囲されていた何年間にも、そこで自分を役立てる方法を探ることが義務でした》と書き、続けて次のことを強調しているようにみえる。

《それでいて同時に、どう申しましょうか、意見をもつことはたやすい、安易すぎる、という自覚がありました。たとえ正しい意見でもそうです。》

ここで彼女はなにを言おうとしているのか。意見を向かわせようとする現実にかかわ

らないところでの《意見をもつことはたやすい、安易すぎる》、つまり、現実にに申し掛かられることのない安全圏に自分の身を置いているかぎり、どんな《正しい意見》でも気楽に口にすることができるということだ。このことはどういうことかといえば、どんなに《正しい意見》であろうとも、現実ににかかわらせないところでの意見は《安易すぎる》だけでなく、現実ににとって全く無力であることを示している。ソクタグは、《自分がそれまで知らなかったり、この目で見ることがなかったりする事柄については、けっしてどんな立場もってはならない》ことを、自分に課してきたと言う。自分が知ったことのなかに、この目で見ただけのなかに、踏み入ることによって立場をかたちづくっていくということが語られているのだ。

《善意があっても思慮深くとも、直接の体験の具体性にとって代わることはけっしてできません。リアルなものの衝撃。私たちはフィクションの作家としてこのことを知っているのではないのでしょうか。

身をもって目撃すること、参加すること。この問題を出したわけを言いましょう。旧ユーゴスラヴィアにもアルバニアにも行ったことがなく、その地の人々の歴史や地理もまったく見当もつかない人々が、バルカン半島において十年も続いた恐ろしい事態をめぐり立場をとる。その多くがあまりにも私の予想どおりの立場だったことに自分でもショックを受けたのです。どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘に与したり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽっちの考えもない。それがみえみえのアメリカやヨーロッパの知識人たちが尊大にもあの戦争について語るのを目にして、怒りを禁じえません。》

《直接の体験の具体性》や《リアルなものの衝撃》に、善意とか思慮深さというものは一体どのように通用し、どこまで耐えられるものなのか。善意や思慮深さがもし《直接の体験の具体性》や《リアルなものの衝撃》から弾き飛ばされるとすれば、やはり善意とか思慮深さなどは直接の体験にけっして揺さぶられることのない、《リアルなものの衝撃》に突き入ることのない安全な無風地帯での、善意の手を差し伸べることにどんな苦痛も犠牲も払う必要のないものであり、思慮深くあることがどんな危険も隘路あいろも招き寄せることのない、その程度の身振りの装飾にほかならないということである。もう少し彼女の言葉に耳を傾けるなら、《直接の体験の具体性》のなかでこそ発揮される善意や、《リアルなものの衝撃》に比例する度合いで募ってくる思慮深さというものは、一体どのようにして可能なのか、という問いが渦巻いている。その問いを引き受けないのであれば、私たちの人生にとって善意も思慮深さもなんの役にも立たないだろう。

《身をもって目撃すること、参加すること》をソクタグが強調するのも、《身をもって目撃》し、《参加する》なかで自分の意見をもつこと、しかもその意見に偏りが少なく、正しくあるにはどうあればよいのか、ということをも自分の身に引き寄せていつも考えて

いるからだ。《どんな戦争地帯にも一度も近づいたことがなく、戦闘に与したり、爆撃のもとで生活したりするとはどんなことかこれっぽちの考えもない》のに、戦争に対していつも《正しい意見》を発表する西欧の知識人に対する彼女の怒りを、《身をもって目撃》し、《参加する》という渦中の思考の問題に変換して捉えるなら、問題は戦争という限定を超えて拡がり、彼女の怒りももっとよくこちらに伝わってくるだろう。渦中の思考を徹底させることにおいてしか、私たちは思考そのものを生きることにはできない。なぜなら、私たち自身、さまざまな問題の渦中で生き、苦しみ、のたうちまわっている存在だからだ。

《真剣であること。それは私たちが二人とも身を投じている計画です（いまや、それは計画以外の何ものでもない）。真剣であるということは責任をとるということです。でも、独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか。どうすれば「私」を放棄できるか。何であれ、自分はこのことなら知っているとの判断は、この「私」をとおして得るものではあるのですが（シモーヌ・ヴェイユは、「私たち」よりひどい唯一のもの、それは「私」だ……と語りました。）》

こう語るに至って、ソクタグが真剣に語ろうとし、語ってきたことがこちらにくっきりと読み取れる。渦中の思考は渦中であるが故に、しばしば偏狭に陥りやすく、間違いを犯さずにはいられない。《独善的にならずに正しくあるにはどうすべきか》と問うている彼女は、渦中の思考に付きまとう偏狭さを充分知り抜いている。知識人が《直接の体験の具体性》から遠ざかり、《リアルなものの衝撃》から身をかくまい、《身をもって目撃》し、参加しようとししないのも、渦中の思考においては《正しい意見》を突き出すことの困難さを見極めているからである。しかしながら、渦中の思考から遠ざかった《正しい意見》というものは、その正しさが現実に生きている人間の問題の渦中とは無縁であるが故に、フィクションでしかない。このことはもはや自明であり、そこからしか出発する以外にない。いかに間違いやすく、偏狭を免れえないとしても、現実の人間は具体的にそのようにして存在しているから、渦中の思考から出発するほかないのである。

では、渦中の思考のなかで人間はどうして偏狭に陥りやすく、間違ってしまうのか。それは、渦中では目の前の出来事に大きく張り付けられて、周囲を見回す余裕がなくなってしまうからだ。渦中とは、問題との距離が限りなく零になっていく状態であるといってもよい。木を見て森を見ない状態になってしまうので、どうしても問題に対して偏狭になり、独善的であることを免れなくなるのだ。渦中の思考はそのしほくあ宿痾を刻印されており、知識人は渦中にうづくま蹲る大衆に対して、木を見ずに森だけを見ようとする習性に傾いていきがちになる。木を見て、同時に森を見るということが、どうしてもできないのか。木を見ていたら森が見えなくなってしまうからだ。であれば、木を見ることに森を見ることに重なるようになればよいのである。いいかえると、木を見ることのなかに森が見

えればよいのだ。だが、そのことは可能であるか。

渦中の思考で誰もが独善的になって正しくなくなってしまうのは、自分が自分に張り付いて、自分からますます解放されなくなっているからだ。圧倒的な問題に押し潰されそうになっている渦中においては、誰もが自分が自分を拘束する関係になっており、自分が自分に対してますます見えなくなっている。だから、渦中においてこそ、問題をよく見通すために自分は自分から解放されなくてはならないし、自分から解放されていく度合いで渦中の思考は深まりをみせていく、とソクタグは言っているように聞こえる。そう、彼女からすれば、大きな問題に申し掛かれて四苦八苦している渦中とは、所詮自分が自分に固執せざるをえなくなっている状態にほかならないから、自分が自分から解放されていくことによって、渦中に引き寄せられているあらゆる制約は突破されていかねばならないのだ。

もちろん、ソクタグも発しているように、問いは《どうすれば「私」を放棄できるか》というところへと行きつく。そこまで問いはやってきたが、《「私」を放棄できる》道筋が明らかにならなければ、問いは生き延びることができない。「自分を超える水準」において問題の渦中に飛び込むことが、この問いに接続しているように思われる。「自分を超える水準」の度合いだけ、自分が自分から解放されているにちがいないからだ。つまり、「自分を超える水準」において渦中に閉じ込められずに、渦中から解放されていくだろう。では、「自分を超える水準」はどのようにして獲得されるのか。私の経験では、本質的な思考を突き詰めることにおいて、その思考のなかに「自分を超える水準」が小さく連続して起きてくる筈だ。その小さな「自分を超える水準」が前震の役割を果たして、本震としての「自分を超える水準」が大きくやってくるのではないだろうか。いずれにしろ、思考が根源的であればあるほど、「自分を超える水準」がかたちづくられていくのだと考えられる。おそらく根源的であることのうちに、「自分を超える水準」が内在しているだろうからだ。

現実にかかわらないことにおいて《正しい意見》であることができているということは、現実にかかわることによって《正しい意見》も激しい変容に晒されずにはいなくなるということである。《身をもって目撃》し、《参加する》ことで、《直接の体験の具体性》に食い込まれ、《リアルなものの衝撃》に覆われていく《正しい意見》は当然ながら、大きな変容を余儀なくされる。つまり、《正しい意見》は現実に接することによって、さまざまな困難さに申し掛かれた現実のなかで生きられていく意見として成長しなければならないのだ。松下昇の簡潔な言葉がここで交響してくる。「1968年」と交差する闘争を開始した直後に、「1969年8月 にて」掲示されたパレード的表現のなかに、次の一行が見出される。

《敵でも味方でもない、ある圧倒的な力によって問題提起の正しさが弯曲していくので

はないかという一瞬おとずれる感覚のむこうに、はじめて、ほんとうの闘争がはじまっている。」

どんな問題とも現実的に交差することがない場所で語られる正しい《意見をもつことはたやすい、安易すぎる、という自覚》を忘れずに、《直接の体験の具体性》によって《リアルなものの衝撃》を被るために、《身をもって目撃すること、参加すること》を作家として果敢に励行し、その状況のなかで「書きつづける」というソクタグの姿勢と、《正しい意見》を弯曲させていく《ある圧倒的な力》に対する《ほんとうの闘争》に取り組む松下昇の姿勢とが、深く呼応し合っているのが感じられるのだ。敵や味方を超える《ある圧倒的な力》に対抗する《ほんとうの闘争》に踏み入っていくためには、「私」を放棄できる》水準の闘争をどのように展開するかが問われている、というように読み取ることができる。

ソクタグについてはもう一つ、同日付の「往復書簡」から問題を取り出しておく。

大江健三郎は4月25日付書簡で、ノーベル賞受賞直後の《アトランタで先行する受賞者たちとの会議》に触れて、次のようなことを書いている。

《帰り道のニューヨークで友人が催してくれたパーティーに、エドワード・サイードとともに、あなたが来てくださいました。どうしてあのように無意味な会議に出たのか？とあなたは問いかけられました。私はお答えしました。

パスはメキシコの、ショインカはナイジェリアの、ウォルコットはカリブ海の、モリソンはアメリカ黒人の、そしてプロツキーは崩壊したソヴィエトの、みなそれぞれの20世紀の傷痕を魂に刻んで生き、かつ普遍的に表現している。自分は超国家主義の日本で少年時を、戦後民主主義の輝きと幻滅のなかで青年期以後を生きたモデルとして、そこに参加したいと思った……。》

この個所についてソクタグは記憶にないが、《その問いかけがあなたの脳裏に残した影響についておわびします》と述べ、自分にとってもプロツキーは親友で、パスとは友だち、ウォルコット、ショインカ、モリソンとは知り合いなので、彼らと出会うことが「無意味」とは思わないと釈明した上で、「無意味な会議」についてこう答えている。

《はっきり言えることは、あの会議（そう呼ぶべきものだとしたら）が私にとって「無意味」に思えた原因は、出席者の顔ぶれではなく主催者の問題です。お会いする直前にあなたが出席なさった二日間のイベントは「文化オリンピック」と呼ばれていて、オリンピック史上のもっとも商業化された金儲け偏重の大会、第26回オリンピック大会のための大がかりなウォーミングアップ、PR事業の一環でした。偉大な作家たちが大会のプロモーションのために（激しすぎる言葉かもしれませんが）搾取されている、と私は思いました。

アトランタは文化的な豊かさで知られる都市ではありません。いずれにしてもオリン

ピック委員会は、バルセロナで開催された第25回大会のような豊かな文化的環境に匹敵するものを提供しよう、などという意欲はもちあわせていませんでした。しかし誰かが、ノーベル文学賞受賞者をアトランタに招集して短期の顔見せをやったらどうか、と思いついたのでしょう。委員会にすればあなた方はスーパースターです。まもなくアトランタにやって来て勇猛果敢ぶりを発揮し、スポーツ界のノーベル賞とも言えるメダルを目指して競い合うスポーツ界のスーパースターたちと同じように。

あなたはなぜ自分たちがアトランタに招かれるのか、理由を考えることすらなかったはずです。大江健三郎は喜んで招待を受け、プロツキーやパスたちと話し合う機会をもつ。どこも悪いことはありません！ それでも事実は変わらず、あなた方は真剣な文学の意気軒昂な目的を前進させるためではなく、オリンピック大会の宣伝に利用されていたのです。

お会いしたニューヨークでのディナーの席で私の問いかけの背後にあったのは、このような思いだったはずです。私は古典的な西洋流の考え方をして、「不純な」前後関係をいまいましく思っていました。超商業的なオリンピック大会と文学とは、どんな関係があるのだろうと。

あなたが私の問いかけを意味不明と思われたのも納得できます。

私もそう思います。あらゆる社会的状況は、アトランタでのノーベル賞受賞者の会合も含めてでしょう、いやおうなく「不純」であるということを私は意識していますし、あのときもその意識はあったと思います。》

《作家が何かを代表する人物となった場合は、「利用される」ことになります。比較的危害の少ないこともあるでしょうが、それでも商業主義は気になります。あなたもそうでしょう。私たちの意図さえ純粹なら、いかがわしいスポンサーでも共謀者にならないですむはずだ。そう信じられたらと願うのですが、そうはいきません。》

ソタグのこのシビアな指摘に対して、6月25日付で大江健三郎は、《私は、反対者としての精神によって文学を作る、というあなたの態度にも異論がありません》と前置きして、こう返信している。

《ブレイクは若者たちに「軍営、法廷そして大学」のなかの「雇われ人」に対して反対せよ、と呼びかけました。いま「雇われ人」は、マスコミはじめ文化構造の全域をみたくしています。私の受賞直後の、軽率な振る舞い到你が注意してくださったのは正しかったと思います。

私があこの旅で会った、あなたのすばらしい友人プロツキーは、道義的な鋭敏さと真剣さそのものの人格でした。シニカルでなく、証言し、それもかれの真に知っている被害者のために声をあげる人でした。私はあなたの手紙を読みながら、あの時もう人生の時をほとんどあますところのなかったプロツキーの深い穏やかさ、それと矛盾しない不機

嫌さ、そしてかれが初等・中等教育で詩を読ませることの重要性を熱心に説いた声音を思い出したのです。」

どのような問題がここで擦れ違っているのか、整理してみよう。ノーベル賞受賞直後、アトランタで開かれた《先行する受賞者たちとの会議》に参加した大江に、ソクタグが《どうしてあのように無意味な会議に出たのか？》という問いを投げかけたのが、問題の発端である。当然、大江にとって知人のパスやプロツキーなどの作家や詩人たちに久し振りに会って話をするには「無意味」ではなかったもので、ソクタグの「無意味な会議」という問いかけは彼の胸中にしこりとなって残り、往復書簡の機会を得て浮上させたのである。大江のこの疑問に対してソクタグははっきりとこう答える。

作家たちと会ったこと自体が「無意味」なのではなく、《オリンピック史上のもっとも商業化された金儲け偏重の大会、第26回オリンピック大会のための大がかりなウォーミングアップ、PR事業の一環》としての「文化オリンピック」と呼ばれた会議への参加によって、《偉大な作家たちが大会のプロモーションのために（激しすぎる言葉かもしれませんが）搾取されている》ということが問題なのであり、《出席者の顔ぶれではなく主催者の問題》において、「無意味な会議」だったのだ、と。もちろん、深刻なのは《搾取されている》という厳然たる事実ではなく、大江やパスやプロツキーらの《偉大な作家たち》が一様にそのことに気づけなかったことにある。だからソクタグは、《あなたはなぜ自分たちがアトランタに招かれるのか、理由を考えることすらなかったはずです。大江健三郎は喜んで招待を受け、プロツキーやパスたちと話し合う機会をもつ。どこも悪いことはありません！ それでも事実は変わらず、あなた方は真剣な文学の意気軒昂な目的を前進させるためではなく、オリンピック大会の宣伝に利用されていたのです》と、声を大にして言いつづけるのだ。

どうしてノーベル文学賞受賞者である大江たちは、そんなことに気づかないのか。逆にソクタグにはどうして会議の舞台裏がみえてしまうのか。いうまでもなくソクタグには見通せて、大江たちには見通せないのは文学の捉え方の問題であり、つまるところ、文学の問題である。問われているのは依然、文学なのだ。大江たちにアトランタでの会議がどのような会議であるのかが見えなかったのは、彼らの文学では見通せなかったということである。それは、そのような会議が見通せないところで彼らは詩や小説を書きつづけてきたことを意味している。彼らの詩や小説は大きな「盲点」をかかえこんでいたのであり、そのような作品群においてノーベル文学賞を受賞したのである。いいかえると、ノーベル文学賞受賞というかたちで受け入れられてしまう「盲点」に、彼らの文学はどうしても抗うことができなかったのだ。

文学とは一体、なにか、という問いの前にソクタグが立ち尽くしているのがひしひしと伝わってくるが、自分の小説のなかに文学があることをおそらく信じて疑わない大江

には、その問いは無縁であるのが感じられる。《委員会にすればあなた方はスーパースターです。まもなくアトランタにやって来て勇猛果敢ぶりを発揮し、スポーツ界のノーベル賞とも言えるメダルを目指して競い合うスポーツ界のスーパースターたちと同じように》というソクタグの指摘には、文学界のスーパースターとしてスポーツ界のスーパースターたちと同列に置かれてしまうことに、あなた方の文学はどうして沈黙しているのか、という抗議の声がもちろん含まれていた。スポーツ界よりも文学界が上位にあるということではない。文学というものは上位にあるとか、同列に置かれているとかの位階性と根本的に対立するものであっても、本来的には無縁であるからだ。

彼らが、《なぜ自分たちがアトランタに招かれるのか、理由を考えることすらなかった》のは、彼らが自分の文学の内に立っていたからである。だから、彼らの文学の外にあるアトランタの会議は彼らにはみえなかったのだ。それに対してソクタグにその会議がどのような会議であるかがよくみえたのは、彼女はいつも自分の文学の外に立っていたからである。大江たちは自分の文学の内に立って文学のことを考えていたのに対して、ソクタグは自分の文学の外に立って文学のことを考えていたのだ。「無意味な会議」であることを問われた大江が納得できないまま、しこりとしてずっとかかえこんできたのは、文学の外から問いを発しているソクタグがみえなかったからである。「往復書簡」は彼らの立ち姿の決定的な相違を見事に際立たせていたといえる。文学の外に立って文学のことを考えつづける場所から言葉を繰り出している彼女の書簡のなかの、たとえば、《直接の体験の具体性》とか《リアルなものの衝撃》とか、《身をもって目撃すること、参加すること》などという言葉が、したがって大江に届く筈がなかったと思われる。

「無意味な会議」であったことを縷々説明したソクタグの言葉は、はたして大江に受けとめられただろうか。もちろん、受けとめられなかった。

《私の受賞直後の、軽率な振る舞い》という言いかたが、なによりもその証左であった。《軽率な振る舞い》なんかではなく、文学をどのように考えるか、という問題であったからだ。大江はソクタグの言葉のなかに文学の根本的な問題を読み取ることができずに、自分の《軽率な振る舞い》に対する《注意》として聞き流そうとしたのである。その会議が大江にとって言葉を交わす最後の機会となったかもしれない生前のプロツキーについて、切々と書き連ねる調子のなかに敢えてソクタグの説明を素直に受けとめまいとする反撥のような感情を覗かせていることから、それは明らかであった。

蟹は甲羅に似せて穴を掘る というが、大江も自分の 甲羅に似せて穴を掘っていたのだ。「自分を超える水準」でソクタグの言葉を受けとめることができなかったのだ。彼が、《反对者としての精神によって文学を作る、というあなたの態度にも異論がありません》と言うとき、彼にとってその《反对者としての精神》とは、文学の内部でかたちづくられるものであって、文学の外部からやってくるものではなかった。あくまでも

文学の内部における《反対者としての精神》にほかならず、ソクタグが考える、文学の外部に位置する《反対者としての精神によって文学を作る》とは決定的に隔絶していた。

『新しい人よ眼ざめよ』というタイトルの大江の著作に関連していえば、残念ながら彼の文学の内部から「新しい人」が現れることはなかったし、「新しい人」が眼ざめることもなかった。「新しい人」は文学の外部から文学の内部にむかってやってくる以外にありえなかった。

文学はたえず文学の外へ出て行かなくてはならない。なぜなら、文学は文学の外でこそ最も必要とされており、文学の外においてこそ成立するものであらねばならないからだ。北大西洋条約機構（NATO）によるセルビア空爆をめぐるソクタグの文章「われわれはなぜコソヴォにいるのか」は、「われわれはなぜサラエヴォにいるのか」と同様に、われわれはいま、どこにいるのか、という問いとして読み取る必要があるだろう。作家であるソクタグからすれば、当然「どこ」とは文学の「どこ」であったが、文学の内部から逸脱しつづける彼女はおくびにも出さなかったが、文学の外へと逸脱する勢いには必然的に言葉の外へと飛び出し、人間として「存在すること」の課題に一気に突き入ろうとする迫力と加速度が孕まれていた。文学にとって文学の外とはなにかという問いは、言語にとって存在とはなにか、逆に、存在にとって言語とはなにか、という問いが突き出されてくる場所をソクタグが占拠しているようにみえるということが大変重要だったのだ。

さて、『1968年の革命』史論の副題をもつ絳秀美の『革命的な、あまりに革命的な』は、「世界革命は、これまで二度あっただけである。一度は1848年に起こっている。二度目は1968年である」（イマヌエル・ウォーラーstein他著『反システム運動』）をイントロダクションの冒頭に引いて、次のような表明を行っている。

《われわれの史論は、直接には、この言葉に導かれているとあってよい。マルクスの『共産党宣言』が刊行されたのと同年の、ヨーロッパの1848年革命についてはここではさしあたり問わずに、である。狭義には全共闘運動とも呼ばれる、日本における「1968年の革命」を、今なお続く「世界革命」の一環として位置づけ直すことが本稿の目論見にほかならない。そしてさらには、68年革命を保証し準備した - あるいは、逆に68年革命に触発された - 「68年の思想」を、とりあえず「日本」という場に限定しつつ描出してみることが、われわれの目的である。》

また、「1968年」を小熊英二『民主と愛国 - 戦後日本のナショナリズムと公共性』にみられるように、《単にロマン主義的反抗とその挫折としてのみ括りうる》ような論じ方で通過しようとする言説に対しても、こう高らかに宣言する。

《しかし、68年が今なお持続する世界革命であるとは、それが圧倒的な「勝利」以外の何ものでもないということなのだ。68年への批判が必要だとすれば（実際に必要な

のだが)、それは何よりも、その勝利を「挫折」と見なさせてしまう歴史的な光学に対してであり、その今日的な帰趨なのである。どこまで可能であるかは知らないが、本書は徹底して肯定的な史論たることが目指されている。》

「1968年の革命」と言い、「世界革命」と確信をもって断言しようとする絃の「1968年」へのこだわりかたは、松下昇の闘争の飛翔と交差するところが微小であるかもしれないとしても、「1968年」に一体、なにが起こったのか、という問いにもう一度全共闘世代を振り向かせる気運の形成に寄与していることは確かであろう。しかしながら、絃が「1968年」に拘泥するのであれば、どうして彼の展開する「1968年」は松下昇の闘争を視野に収めなかったのだろう。彼からすれば、視野に収めるに値するほどの闘争ではなかったということかもしれないが、それは違う。決定的な限界であるとはっきりと明言しておかなくてはならない。彼の「1968年」が松下昇の闘争を視野に収めることができなかつたのは、闘争が彼の「1968年」の視野をはるかに超えていたからであり、彼の「1968年」は闘争が展開してきた「1968年」の拡がり、深さにまで到底及ぶことができなかつたことを物語っていたのではなかつたか。

彼の先の著作にはしたがって、詩人であり、明治学院大学の「造反教官」であった天沢退二郎と「論争」することになる北川透や菅谷規矩雄が、僅かながら登場するのに松下昇の登場は全くない。もちろん、彼は気づきもしないし、意識すらしていないのだろうが、単に彼の「1968年」の文脈に松下昇が登場する余地がないだけのことだとしても、松下昇の「不在」において彼の著作は際立っているようにみえる視点はありうる、ということやはり強調しておかなくてはならない。「論争」をする北川透や菅谷規矩雄と異なつて、「論争」をしない松下昇はその次元を超えたところで「1968年」の闘争を展開していたのであり、それ故に彼はどうしても捉えることができなかつたにちがいない。

絃が《狭義には全共闘運動とも呼ばれる、日本における「1968年の革命」を、今なお続く「世界革命」の一環として位置づけ直すことが本稿の目論見にほかならない》と宣言するとき、「世界革命」は《今なお続く》うねりをどこに見出しているのだろう。そして彼や彼の著作はその「世界革命」のうねりにどのように参加しているのだろう。また、《われわれの目的は、あくまでさしあたり日本における68年革命の核心をなす「事件」と「思想」の輪郭を描き直すことにある》と言うとき、その「事件」や「思想」は「革命」の従来の概念をどこまでひっくり返すような「事件」や「思想」として取り上げられているのだろう。少なくとも言葉の外へ、表現の外へと「事件」や「思想」を向かわせていくなら、そこで突き当たる存在の場所は彼が唱える「革命」の外での生涯を震撼させる出来事に、私たちを直面させつづけることは間違いない。

2006年5月30日記